

伊 計 島 の 染 織

与那嶺 一 子

調査は昭和62年1月から3回ほど聞き取りを行い、伊計島に芭蕉・苧麻・木綿・絹を素材にした織物があったことが確認され、以下のようなことが分かった。

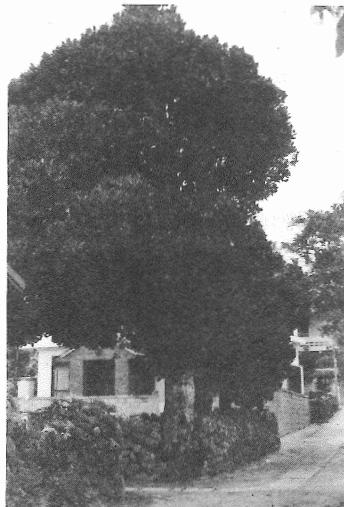
*芭蕉は家の庭に植え付けたものから糸を取り機織りをして自家の着物を作っていた。

*苧麻で糸を取ることは無かった。糸を那覇から買ってきて織る人もいたが、島ではほとんど苧麻の糸は使われなかった。

*木綿を栽培していたことはないが、那覇から買ったトウガシーの白い糸を「みやこ染」の染粉で黒の縞に染めて使ったり、サンジュカナーと言う染められた木綿糸を泡瀬あたりで買ってきて布を織り、自家の冬物の着物を作っていた。

*大正から昭和にかけて養蚕が盛んで、座繰りで引いた糸を使って、白無地を織り、那覇や泡瀬でカタツケさせたり紋付用に黒く染めさせたりしていた。また「みやこ染」の染め粉で黒や青に染め縞文様の柄を織った。無地物は商売用として注文を受けて織っていた人

もいた。



フクギ

*絹や木綿には「みやこ染」の染め粉が使われたが、芭蕉布にはヤラブ、テカチ、クービー、フクギの植物の皮を煎じて染料についていた。

*織った図柄はボウジマ（経縞）がほとんどで、大正から昭和にかけては絣を織る人はいなかった。また着物の柄によって身分が違うということもなかった。

*今、百歳ぐらいの年齢の方は、国頭地方（ヤンバル）で藍に染めさせた絣を地機で織っていたようである。またこの人達の代まではメンサー帯も織って

いたようである。

*大正後期あたりから地機は使われなくなり、ほとんど高機によって織られていた。高機は伊計で作られたものではなく、専門の大工が注文で作ったものを買っていた。

*昭和初期には婦人会主宰の品評会が毎年9月に行われ、各自、できの良い作品を持ち寄ってきた。

『与那城村史』には伊計島の聞き取りで分かったこと以外に、平安座島の染織として、綿花を栽培していたこと、メンサー帯を織っていたということ、アイダマを買い自家で藍を仕立てて染色に使っていったことが載っているが、それについては明確な答えが得られなかった。

また、昭和37年に伊計島について調査を行った琉球大学民俗研究クラブ発行の『民俗 5号』には、村史にてて来る平安座島同様に伊計でも素材の違う様々な織物が織られていたことが記録されており、ここに少し紹介しよう。

- 1.各家で芭蕉を植え、糸取りをしバサージンを作っていた。
- 2.芭蕉に遅れて屋敷裏の空地や畑に木綿を栽培し、冬の常着や綿布を重ねて針を通したフクターを作っていた。
- 3.大正から昭和にかけては、養蚕が盛んであった。
- 4.首里からの士族が住むようになり、着物の文様による身分の差別があった。
- 5.染料は島内の植物の皮を煎じて使い、フクギは黄色にヤラブは赤褐色にまた

テカチで茶褐色に染めた。

6.藍染もあり、わざわざ山原本部半島まで染めに出かけた。

以上のように『民俗』には記述されているが今回の聞き取り調査では、2.の木綿の栽培について、4.の着物の文様による身分の差別について、6.の藍染については、そういうことは自分達の世代では（大正後期あたりから）行われていなかったとの返事があった。

これらの織物は現在は全く行われていない。まず、養蚕に押されて芭蕉布や木綿が衰退し、景気の動向により養蚕が減退してゆくが、第二次大戦の戦禍により織物関係の道具や自家用に織った着物が、島ではほとんど焼かれてしまったことも衰退していく要因の一つであろう。

次に今回の聞き取りのなかで古老が最もよく記憶していた芭蕉布と養蚕について詳しく述べることにする。

芭蕉布について

芭蕉はかなり以前から織られていたようで、繊維となる糸芭蕉はアタイ（屋敷内の畠）や山の中でも栽培されていた。昭和に入ってからは婦人会活動などで芭蕉の栽培を奨励するなどの動きもあった。現在、糸芭蕉はほとんど見られなくなっているが、芭蕉布は自家の衣類を作るのに大切なものであり、戦前までおばあさん達が布を織っていたようである。



糸芭蕉

[糸の取りかた]

芭蕉は植えてから2～3年で熟する。それの皮を一枚一枚小刀で剥ぎ、束ねた皮を、鍋に水と灰を入れたもの（灰汁）で煮炊きする。芭蕉の色が変わると取り出し、竹を割った道具を使って非纖維要素をとり除いていった。道具は竹を二つに割ったものでそれを糸で結わえ、指で押さえながら芭蕉の皮をしごいていった。取り出した纖維は頭を揃えて（上下を区別し）棒に掛けて乾燥させた。処理した纖維はウーバラーを側に置いて機結びをしながら紡いでいた。紡いだ糸はヤーマにかけて回しながら管に巻き込んでいった。経糸にはさらに撚りをかけた。簇は糸により色々使ったが八ヨミの芭蕉布はアラバンチャーと呼び芭蕉のナカグーを使った九ヨミ以上のものと区別した。

[染料について]

染めは植物の皮を鍋に入れ、煎じて染液を抽出した。使われた色は茶色系と黄色系で、藍による染めは大正後期あたりからは行われていないようである。茶色系の染料としては赤褐色に染める車輪梅（シカチギ

ー・ティカジャー）、茶褐色に染めるヤラブが主に利用された。その他、クービーと呼ばれるツルグミの木の皮も茶色に染められた。黄色系としては福木が利用されたが、人によっては黄色を染料として使わない場合もあったようである。

[図柄について]

大正後期あたりから、織られていた図柄は経縞（ボウジマ）のみで、年寄りの何人かは「キーキリーデン」（結切衣）と呼ばれる物も織ったようである。「キーキリーデン」とは白糸の真中を糸で結わえて染めたもので、首里から住みついた土族が織ったり、また教えたりしていたようであるが、普及しなかったようである。

先の『民俗』によると士族は大柄のゴバヌー（碁盤縞）を、常民はタテアヤー（経縞）を着用するなど身分の違いがあったと記されているが、今回の聞き取りでは、そういうことがあったとの回答を得ていない。

養蚕と製糸業について

沖縄での蚕業は記録によると、17世紀前後に久米島から始まる。沖縄の気候は養蚕に適しているということで、明治30年あたりから農事試験場から各町村を回っての指導がおこなわれたりしている。大正時代に入ると、第一次大戦の影響で絹糸の価格が暴騰し、沖縄県でも不振な糖業に代わるものとして養蚕業が着目され、急激に盛んになり、養蚕伝習所の設置や養蚕教師を派遣

するなどの政策を取ったりしている。また大正10年からは蚕種の無償配布も行っている。（『沖縄之蚕業』 沖縄県 昭和7年3月）

伊計島でも大正頃から養蚕および製糸業が盛んになる。古老によると大正10年～15年頃だったと記憶されている。桑の木は各家々の庭に栽培されていたようで、今でも、その名残が見られる。財力のある者は別に桑園を持つこともあったようである。

政府の補助により昭和10年頃（記憶がはっきりしない）、養蚕室が現在の小学校の前に建てられ、養蚕試験場から養蚕教師が派遣され、蚕種の配布を行ったり、技術の指導に当たったりしていたということである。また、島民から指導員が出たりしている。

養蚕業は大戦前までかなり盛んであったが、大戦を境に激減する。繭の不良と生産過剰で価格が低下したことや化学纖維の進出などにより、忙しいが割に会わない仕事となったのが大きな原因であろう。また家内工業であったため、衛生的に悪いという事も原因の一つであろう。古老の話によると、桑園を持っている場合はまだいいが、庭に桑の木を栽培していた家では、朝から晩まで蚕に与える桑刈りで忙しい毎日であったらしい。養蚕及び製糸の仕事は、戦後も昭和34、5年頃まで続いていたようである。

〔糸の取りかた〕

糸取りの方法には手挽によるものと座織によるものがあるが、大正から昭和にかけて盛んだった製糸方法は後者による。蚕には春蚕、夏蚕、初秋蚕、晩秋蚕があり、年に四回糸が取れたが春繭が一番良質であったらしい。繭が完全にできてから、10日以内に鍋に繭を入れ煮る。すると、自然に糸口が現れるので、それを座織という回転道具を左手で回しながら巻き取っていく。

〔染色及び織物の柄〕

繭から取った糸のほとんどは、那覇の公務員や泡瀬あたりから注文された紋付用の白い無地物を織っており、泡瀬や屋慶名あたりで型付にしてもらったり、時には京都のほうに染めに出すこともあったようである。無地物は、ほぼ3日で一反を織りあげ、布にしたあとソーダで煮て柔らかくし、帯ならば部分染を行ったらしい。自家用の場合には「みやこ染」の化学染料を使い格子や経縞の着物を織っていたようである。色の違う糸を二本撚った杢糸（ムディー）を縞文様に使うこともあった。

〔参考文献〕

『与那城村史』 与那城村

『民俗5号』 琉球大学民俗研究クラブ

『沖縄之農業』 沖縄県 昭和七年

『沖縄県史・新聞資料』 沖縄県